

## 令和4年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：檜山地区
- 2 事例報告学校名：せたな町立瀬棚小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 米谷 優
- 4 キーワード：地域・家庭と連携・協働した教育活動の推進

### 1 はじめに 学校の概要

せたな町は北海道の南西部、檜山の北部に位置し、平成17年、3町（瀬棚町・北檜山町・大成町）が合併してできた町である。日本海に面し、北部山地には道南最高峰狩場山（1,520m）をはじめ1,000m級の山々が連なり、中間を後志利別川（一級河川）が流れ、山・海ともに道立自然公園に指定される豊かな自然環境に囲まれた町である。

本校はせたな町の北部に位置し、北に秀峰狩場山、横に馬場川が流れ、開校143年の歴史と伝統ある学校である。昔は江差と並んでニシン漁で栄えた地であったが、漁業資源の減少による主産業の低迷から過疎化、少子高齢化が進み、10年前は123人在籍した児童数は現在37人である。今年度は完全複式の学級編制となり、異年齢集団を生かした縦割り班の活動や体力づくりなど多様な教育活動を展開している。



### 2 地域や家庭と連携した教育活動の推進

せたな町の学校教育目標の基本理念は「ふるさとせたなを愛し潤いと活力ある人間性豊かな人を育む」であり、基本姿勢として「環境を生かし地域社会の連携によるせたな町教育の推進」を掲げている。本校では小規模校のメリットを最大限に生かすため、豊かな自然環境をはじめさまざまな地域素材を生かした特色ある教育課程を編成、実施している。

#### (1) 地域の特色を生かした教育活動

学校から1kmほど歩けば広大な農地や牧草地、日本海が広がる。本校では生活科や総合的な学習の時間等において地域素材を生かした活動を計画に盛り込み、学習を進めている。

##### ① 1・2年生 自然観察（季節さがし）

3kmほど離れた自然農法を営む農園へ歩いて移動し、自然観察を行っている。児童の4割がスクールバス通学ということもあり、自然の中を歩きながら季節を感じ取ることも大切にしている。農園では自然の恵みをいただく農業の取組について説明を聞く。たくさんの生き物が暮らす水田は学びのフィールドとなり、飼育される家畜とも触れ合うことができる。本校PTA会員でもあった農園主は、子どもたちのために農園紹介の紙芝居や多くの仕掛けを用意してくださっている。



##### ② 1・2年生 磯あそび（生き物さがし）

5kmほど離れた遠浅の岩場へ出かけ、海の生き物さがしを行っている。海が目の前にある校区であるが、水遊びは制約も多く、じっくりと生き物を探す経験が少ない状況にある。本活動により子どもたちは安心して海と触れ合い、カニ釣りや魚とりをしながら海の生物の多様性を感じ取ることができる。例年、地元水産業直売所の前浜で実施、駐車場やトイレの借用を依頼して協力をいただいている。

##### ③ 2年生 サケの稚魚放流（ふ化場との連携）

檜山漁業協同組合瀬棚支所さけ・ますふ化場と連携して、例年、学校横を流れる馬場川へのサケの稚魚放流を行っている。タンクにいっぱいの子魚を小さなバケツに移しながら川へ放流。

毎年、秋には馬場川を遡上するサケの姿を目にしている子どもたちは、サケの稚魚が大きくなって帰る姿を想像しながら送り出す。命の循環を体験的に捉える貴重な経験である。

#### ④ 3・4年生 水に賢い子どもを育む年間型活動プログラム

地域にはB&G海洋センターを中心に体育館やプール、艇庫等多くの施設が整備され、幅広く活用されている。せたな町教育委員会社会教育係、瀬棚海洋クラブとの連携により毎年、総合的な学習の時間で地域の自然を題材として探究学習を進めている。今年度は特に檜山振興局や北海道栽培漁業瀬棚センターとの連携のもと「大きくなって帰っておいで！育てる漁業体験塾 in 北海道（海と日本2022）」に参加、漁業講座やマツカワカレイやヒラメの飼育活動を通じた学習に取り組んでいる。また、川の生き物調査では学校横を流れる馬場川にて水生昆虫を採取、観察しながら川のごみ回収について講義を聞き、今後の探究学習に向けて興味・関心を高めている。夏には町三本杉海水浴場横でカヌー体験・海浜清掃・漂着物調査を実施。水の循環や世界とのつながりを体験的に学習し、さらに町内の森の自然観察では水の循環や山と海とのつながりについて詳しく学習している。



#### ⑤ 5・6年生 せたなの魅力再発見

町の基幹産業は農林水産業である。高学年は身近な農業として校区の稲作農家や酪農家の協力を得て稲作体験、農園見学を実施している。また、役場農務課に講師を依頼して町の産業の実情や今後の展望を聞き、SDGsの視点から未来のまちへ提案を行う学習を行っている。地元食材を生かして考案した給食献立は9月と10月のメニューに採用され、ネーミングとともに紹介された。

### (2) 家庭・地域との連携・協働による取組

#### ① PTAとの連携

子どもたちの読書習慣形成をねらい、読書週間の設定や児童会図書委員会による読書大賞、ブックフェスティバルといった活動を計画している。本校PTAは伝統的に図書整備側面支援として図書寄贈を継続している。町学校図書室支援員による図書室環境整備も相まって、子どもたちの読書への興味・関心を高めることができている。また、PTAから派生したおやじ会組織は、コロナ禍により活動規模を縮小しながらも釣り大会や木工教室等可能な企画を実施して、学校と地域との連携を維持している。

#### ② 地域人材の活用

一日防災学校は実行委員会形式で計画を検討し、3年目となった昨年度でサイクルが確立された。役場、消防署、町教育委員会、学校がアイデアを出し合いながら計画を立案し、外部講師としても協力をいただいている。体育のスキー授業では、講師として地域人材を活用し、学校運営協議会で意見をいただいたブックフェスティバルでは町図書センターや読み聞かせボランティアの協力を仰ぎ、効果的な教育活動が展開できるように工夫している。



### 3 おわりに

コロナ禍による行事の見直しや精選が進む中、小規模複式学校で大切にしたいのは集団で学ぶことである。少ない人数であるからこそ、複数学年や縦割り班、全校的な活動を通して自分が大切な存在であることを学び、協調性を育み、社会で生活していく上で必要な力を体得することができるように、地域の特色を存分に生かした教育活動を今後も継続していきたい。